

1学年だより

夢の宅配便

1年学年主任

水野 喜代治

「許す心」 NO4

私は、3歳の時に父を交通事故で失った。事故に遭った知らせを受けて、家族の心がアルミ缶を押しつぶしたようになって空気がなくなったのを今も覚えている。心の底から力が抜けていくようなあの気持ちが私の心の中にはいつもある。加害者は逃走し、事件となった。この事件は解決することもなく60年の歳月が流れた。母は、学校給食の調理員となって身を粉にして、3人の残された子どもたちを育てた。10歳年上の長男が私の心の支えとなって、未っ子の私を常を守ってくれた。大好きな兄だった。兄が、二十歳の時にタクシーにはねられて命を奪われた。即死だった。母が兄を抱きしめて泣いていた。なぜ、兄を奪ったのか、なぜ、優しい母を押しつぶすのか、受け止めようもない悲しみが容赦なく私に襲いかかり、グラスを落とした時のように心が粉々になっていくのを止められなかった。

兄の命を奪ってしまった運転手は、兄と同じ20歳の青年だった。青年は、10月13日の兄の命日になると、お墓に花とお線香をあげに毎年来た。お墓参りをした後に、家に来て母にお線香をあげさせてくださいとお詫びとともに訪れた。母は、拒否することもなく、無言で青年を家に通して、仏壇の前に座布団を差し出していた。青年は深々と頭を下げて、「申し訳ございませんでした。」とあいさつをし、お参りをして帰った。青年が毎年来るので、母は、10月13日になると外出する日も玄関のカギをしめることはなかった。青年は、留守の家にあがって、果物を備えて、お線香をあげてお参りしてかえっていった。

月日は流れて、28年が経った。兄を失った時、小学校六年生だった私も40歳となっていた。この年の10月13日に、例年のようにお参りに来た青年に母がお茶を出して、「私も70歳になりました。時が流れましたね。私もいつお迎えが来るかわからなくなりました。お参り、ありがとうございました。もう、大丈夫ですよ。」と青年に話しかけた。青年は涙を流して、頭を下げていた。「亡くなった信一は、帰ってきません。あなたと信一は同じ年です。自分を大切にしてください。」と白髪頭になった青年に話した。次の年から青年は、お墓に花をあげにお参りには来たが、家に来ることはなくなった。

「あの人を許してあげないとあの人の苦しみは消えないから、信一がおかあちゃんの体を使って言ったんだよ。」と母が涙をためて私に話しかけた。私は、この母から生まれて幸せだと心から思った。